事後報告

タイトル：社会主義批判としての暗黙知概念－マイケル・ポランニーの暗黙知と自生的秩序論

報告者：今池　康人(関西医科大学・非)

司会者：太子堂　正称(東洋大学)

1. 報告の概要

本報告ではマイケル・ポランニーの自由論と暗黙知の関係について検討した。ポランニーの暗黙知概念は経営学分野においてその名を知られている。しかし、その研究は社会主義批判に端を発するものであり、ポランニーの自由論と深いかかわりを持つ。

ポランニーは自由を公的自由と私的自由に区別し、公的自由こそが自由主義社会における特徴と述べた。公的自由の下では個人は社会や国家に貢献する責務と信念を求められる。そうした社会において、個々のイニシアチブが自生的秩序によって調節される。

そして人間の知識について議論する際、ポランニーは人間が言葉にできないが知っている知識を持つことに触れ、それを暗黙知と名付けた。自由主義のもとで科学者たちは「探究者の社会」と呼ばれる社会を築き、無意識のうちに相互調節を行うことで科学体系を作り上げていく。それは、社会主義国家などでは不可能な事象でもある。人間の知性の裏側には暗黙知という言葉では説明できない知識が存在する。それゆえ、全てを解明・設計しようと目指す主義・制度は構造的欠陥を抱えており、探究者の社会のように暗黙知を活かすことはできない。

ポランニーは暗黙知の議論を通して自生的秩序に基づく伝統的な自由社会の姿を求めた。そして、学問への政府介入に対し警鐘を鳴らし、探究者の社会の姿を提示した。科学者たちの社会は相互に調節し合い、国家の介入がなくとも技術の発展や社会への貢献が可能となる。

1. 質疑の概要

本報告に対し、ポランニーの公的自由は全体主義の論理に容易に転落してしまう危険性があるのでは、という質問は挙げられた。実際に、社会への貢献を求める公的自由の理論と社会主義の類似性はポランニーも指摘している。そして、ポランニーは大陸の自由主義がその理論に忠実に進めすぎた結果、道徳的に敗北しファシズムの台頭を許したのに対し、イギリスは自由を伝統の枠組みの中に制限したからこそそれを免れたと指摘する。これらを踏まえると社会の伝統や制約に対してどう振舞うかが公的自由と全体主義の大きな違いと考えられる。

　次に、本報告は「社会主義批判」と銘打たれているが社会主義が表面上力を失った現在においてどのような意義を持つのか、という質問をいただいた。本報告では分量の都合上社会主義批判に焦点を当てたが、実際はそこから発展し懐疑主義や合理主義全般への批判を行っている。人間の知性には暗黙の要素が存在し、その全てを明示・解明することはできず、それを目指す主義・思想は失敗するというのがポランニーの主張である。その問題意識は社会主義に限定されるものではない。学問への政府介入に関する議論が活発になっている昨今、ポランニーの議論は大きな役割を持つのではないだろうか。

　また、その他の意見として、ポランニーの自由主義は反設計主義で伝統を重んじる「保守的な」自由主義でありそこがポランニーの独自性でもある。そうしたポランニーの「公的自由」の概念をさらに解明することが今後必要となる、とのご指摘をいただいた。おっしゃる通り、ポランニーの自由論や暗黙知を議論する上で公的自由の解明は非常に重要になる。公的自由のさらなる解明については今後の課題として検討を続けていきたい。